言語表出が困難な肢体不自由児の発信を豊かにする自立活動の指導
―発信の意図をより明確に教師に伝えるための支援の工夫―

特別支援教育班　田中　邦治（特別支援学校教諭）

1 主題設定の理由

児童

・「〇〇の絵本を読んでほしいな」
・「あのおもちゃで遊びたいな」
・「先生と遊びたいな」

やりとりが成立しづらい

・「何かを伝えようとしているな」
・「読みたい絵本はどっちだろう？」
・「やりたいことは本当にこれでいいのかな？」

教師

・視線、表情、発声などで発信するが、意図が明確に相手に伝わらない。

・児童が発信していることに気づくが、その意図を正確に読み取ることができない。

児童が自分の意図を、関わり手である教師に明確に伝えることができるようになるため の支援が必要！　⇒　自立活動の指導において実践

2 研究の概要

研究の構想

〈目指す児童像〉
自分の気持ちを関わり手に明確に伝えることができる児童

教師

本児の意図を読み取る力

明確に伝えようとする意欲
「〇〇がやりたい」
「伝わった」「伝えたい」
限定的な人・場面
⇒より多くの人・場面へ

自分なりのコミュニケーションツールを活用する力
・自分に合ったコミュニケーション手段の獲得・活用する力の向上
・随意的で精度の高い動きの発見・獲得

自己有用感
「できた」「わかった」「楽しい」

応答性の高いやりとり場面の設定
本児の動き、認知発達、興味・関心に応じた
教材の工夫
コミュニケーションツールの工夫
ポジショニング支援
教師の共感的な関わり
児童の健康状態への配慮

実践

多面的な実態把握

〇児童の全体像、よさや課題を捉える

よさ	課題
ＩＣＦの視点を用いた実態把握シートから（抜粋）	
・友達や教師、絵本などの名前が分かる。 ・興味がある物への注視や追視ができる。 ・写真、絵本などの実物の提示によって、やりたい活動を視線で選択することができる。 ・興味のある人やおもちゃ、楽器などに手を伸ばして触ろうとする動きが見られる。	・視覚刺激によって注意がそれやすく、教師とのやりとりが持続しない場面が見られる。 ・活動の選択が曖昧と受け取れる場面が見られる。 ・座位保持装置付きの椅子で座位姿勢をとることができるが、咳き込みや手を使うことによって起こる頭部の傾きにより、姿勢が崩れてしまう場面が見られる。
重度障害児のコミュニケーション発達評価シートの結果による考察から（抜粋）	
・写真や絵、言葉など抽象的なものを理解する力がある。	・肢体不自由により表出手段の伝達性に課題が見られる。
やりとりの芽生えと展開の結果による考察から（抜粋）	
・関わり手である教師へ注意を向けることができる。	・自分から関わり手の注意を引くことや、やりとりを自分で開始、終了することが難しい。

実践「自分の気持ちを先生に伝えよう」

実践1

応答性の高いやりとり場面の設定
・遊びたい活動を視線で選択

教材の工夫
・興味・関心を引き出し、操作可能な教材
（どの方向から押してもONになるスイッチ　＋　ピッチングマシーン）

コミュニケーションツールの工夫
・分かりやすく、伝えやすい写真カードの作成

ポジショニング支援
・姿勢安定のための座位保持装置の調整、枕の作成

・意図的な手の動きが見られた。
→方向性を意識した手の動きが出せるのでは？

・「もう一度やりたい」や「ほかの遊びをしたい」も伝えることができるのでは？

・体幹や頭部は安定したが、肘がテーブルから落ちてしまう場面が見られた。

授業改善

実践2

応答性の高いやりとり場面の設定
・「もう一度やりたい」、「ほかの遊びをしたい」を視線で選択

教材の工夫
（右に倒すとONになるスイッチ＋ 写真が立ちあがるおもちゃ）

コミュニケーションツールの工夫
・「おしまいBOX」の活用と「もう一度カード」の作成

ポジショニング支援
・上肢安定のためのテーブルの作成

3 成果と課題

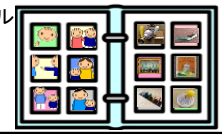
〈成果〉

〇ポジショニング支援により姿勢が安定したことで、児童が視線を使い活動を選択しやすくなった。同時に、**意図的に教材へ手を伸ばす姿が多く見られる**ようになった。

〇児童の興味・関心をもとに、児童の動きで操作可能な教材を工夫したことで、「できた」「楽しい」という自己有用感が高まり、自分から**「やりたい」と活動を選択するようになった。**

〇児童にとって分かりやすく伝えやすい写真カードを使用してやりとりを積み重ねたことで、「これがしたい」といった選択だけでなく、「終わりにしたい」という自分の意図を視線や表情、発声で教師により明確に伝えることができ、**やりとりを持続できるようになった。**

〈課題 〉

〇児童の伝えたい思いが、写真カードの選択では対応しきれない程、充実してきている。児童が、自分の思いをより細かいところまで伝えられるようになるには、絵カードなどで感情や時制などを表現できるような指導を行う必要がある。

〇本研究の実践で行った児童と教師との間のやりとりが、様々な人や場面で行えるように、学習場面の工夫やコミュニケーションブックなどのコミュニケーションツールをさらに工夫していく必要がある。